

2024年2月4日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「ともし火と秤(はかり)」

聖書：マルコによる福音書4：21～25

イエスは「ともし火と秤のたとえ」を語る。ここもまた、先週の「まかれた種」において、「種」は「人間」を表しているのだと読んでみたが、ここも同じく「ともし火」「秤」は「人間」を表していると見ていくとどうなるか。

「ともし火」は、部屋の隅にベッドの下に置くものではなく、部屋の真ん中の燭台の上に置くためではないか。「人間」も同じく誰の目にも留まらないところへ、誰の役にも立たないところに置かれるために存在するのではない。人間の命、命の光は、部屋の隅にベッドの下に置かれるために灯されたのではない。あなたが生まれてきたのは、あなたの命の光を輝かせるために生まれてきた。貧しいがゆえに病があるがゆえに隅に追いやられる筋合いはない。堂々と部屋の真ん中に居ていい、燭台の上に置かれていいのだ。

実は、マルコ福音書3章1節以下に「手の萎えた人をいやす」話がある。イエスはこの人を会堂の「真ん中に立ちなさい」と言う。何故「真ん中」なか？真ん中は注目が集まる場所。イエスは人間としての尊厳が軽んぜられたその人を「真ん中に」招いた。それは常に私たちが、そのような小さくされた者への思いを忘れず、大切にいなさいというメッセージがあるように思う。そのような方が隅に追いやられてはいないか？私たちの地域、社会、この国、世界はどうか？「イエスの怒り」は、小さくされた者を軽んじ、片隅に追いやる社会に向けられている。

誰の目にも留まらないところで、誰の役にも立たないところに置かれるために、人間の命、命の光は灯されるのではない。イエスの周りには、社会の不条理、不公平さの中で人間らしく生きる場所が与えられず、その人のらしさや能力を発揮させてもらえない人たち、人間の尊厳を認めてもらえない人たちが集まっていた。イエスはそんな人たちに向かって「あなたたちこそ、世の光」と言ったのであり、「その命の光を輝かせるためにあなたたちは、生まれてきたんだ。部屋の隅に、ベッドの下に置かれてはならない」と、命の尊厳をイエスは叫んでおられるのではないかと見ることも出来ないか。

「秤」のたとえもまた、この世の不条理を見事に言い当てたものとして聞くことが出来る。大きな秤を持っている者は沢山の食べ物や富を与えられている。しかし小さい秤しか持っていない者は、わずかな食べ物しか与えられない。その結果、持っている者はさらに肥え太り、持っていない者はさらに貧しく、常にひもじさを強いられる。イザヤ書42章の言葉に「主である神はこう言われる。・・・見ることのできない目を開き／捕らわれ人をその枷から／闇に住む人をその牢獄から救い出す」と。(神谷)